



私達アークスタッフ3名をインターナショナルトレーニングプログラムに招待してくれた DogsTrust は、今まで日本のシェルターしか見たことのない私にとって、全てが驚きの連続でした。イギリスのシェルターをご覧になったことのある方は少ないと思いますので、特に日本とは違って恵まれているなあと感じた点についてご報告したいと思います。

DogsTrust はロンドンにあるヘッドオフィス(本部)と、イギリス中に在る17のリホーミングセンター(里親探しを行うセンター。増設中。)から成り立っています。ヘッドオフィスには保護動物はおらず、経理・人事・広報・受注・電話対応等々、大企業さながらの組織・役割分担ができています。アークのように、犬の声がうるさくて電話の声が聞こえない…といったことは当然ありません。また、リホーミングセンターにも細かく組織があり、仕事の分担がきちんとできているようでした。DogsTrust は犬のみの保護を行っており、ケアスタッフも犬だけに集中する事ができ、尚且つ、一人当たりの担当する頭数も10頭前後と、アークに比べて恵まれていると感じました。何より羨ましく思ったことは、人材育成をととても大切にしていること。新しく入ったスタッフには6ヶ月間のトレーニング期間があり、また、その期間が過ぎても、毎週決まった曜日をセンターの休苑日にし、スタッフのトレーニング日を確保しているそうです。それにより、ケアスタッフ自身の技術がアップし、担当している犬にもより良いトレーニング・ケアができ、リホーム率がアップする、という何とも羨ましい好循環が成り立っているようでした。アークの様に収容キャパオーバー同然で、朝から晩まで息つく暇もなく犬猫の世話をしているような状態では、週に一度、スタッフのトレーニング日を確保するのは難しいことです。これは、社会におけるシェルターの位置付けの違いだと言えるでしょう。イギリスでは、シェルターでの仕事がかきちんと職業として成り立っているのです。

また、DogsTrust とアークとの大きな違いは、DogsTrust は自分達のことを「シェルターではなく、リホーミングセンターだ」と言い切っ

ているところですよ。日本ではリホーミングセンターという言葉は聞き馴れないと思いますが、里親さんに出すために犬を一時保護しているセンターです。里親さんに出すことを前提に保護を行うため、犬を引き取る際には慎重に分析し、その犬がリホーム可能か否かを審査します。リホームが無理と判断された場合、引き取りは行わないそうです。ここが日本と大きく違うところなのですが、イギリスには保健所がないため、シェルターが引き取らないと判断したら、飼い主は獣医に連れて行って安楽死を行うでしょう。日本では安楽死、また保健所に対する知識が薄いため、犬を手放すと決めた飼い主は「自分の手で殺すなんてできない」と、とりあえず保健所に入れてしまうことが殆どで、これは最悪なパターンです。保健所に入れられた犬は怯えながら数日を過ごし、最後にはガスによる苦しみを伴う窒息死を迎えるのです。日本では安楽死はまだまだ受け容れられていませんが、保健所とは異なり、大好きな飼い主の手の中で、注射によって安らかな最期を迎えることができるのです。もちろん、安楽死をしなくてもいいように飼い主が責任を持って最期まで飼い続けることが一番ですが、おもちゃのようにペットショップで衝動買いできる日本では、まだまだ難しいことでしょう。こういった環境から、アークがリホーミングセンターになることは難しく、リホームの難しい犬たちがアークの半分以上を占めるという状況と呼んでいるのです。DogsTrust ではリホーム率は90%以上。年間1万頭以上の犬をリホームしています。イギリスでも、やはり老犬は若い犬と比べてリホームは難しいようですが、小さいうちからきちんと社会化のできている犬は、必ずリホームできるのです。子犬をペットショップから買ってくるのが当たり前な日本でも、早く「シェルターから引き取る」ということが当たり前になってくれることを願って止みません。知識のない人が子犬から飼うと、社会化ができていず、万一シェルター

に入ってもリホームが難しいのです。

DogsTrust は「No Kill」の方針としており、リホームの難しい犬たちに何度もチャンスを与えています。問題行動のある犬にはプロのトレーナーがつきっきりでトレーニングする「トレーニングセンター」があります。ここでは年間4~5頭しかトレーニングできず、コストもかかるけれども、きちんと意味を成しているとのこと。人とは生活できないけれども犬には大丈夫、という子には「サンクチュアリ」、老犬たちが暮らす「オールドドッグホーム」と、最期まで生かすための努力が伺えます。アークでも老犬ホーム(アークではこれをサンクチュアリと呼んでいます)を設立すべく、基金を集めていますが、アークに暮している老犬が皆サンクチュアリへ行ったら、アークはガラガラになるでしょう。それだけ、日本では老犬のリホームは難しいのです。犬のことをよく分かってらっしゃる方がアークから老犬をもらって下さると、スタッフ一同「奇跡だ!」と狂喜乱舞の有様です。アークにはとても愛らしい老犬が沢山います。犬を飼いたいけど自分の年齢を考えると15年も飼うのはちょっと…という方、ぜひアークへお越しください。きっと、同じ歩調で一緒に人生を歩んでくれる犬に出遭えると思います。

話がそれましたが、最後に。今回のプログラムには東欧のボスニアからも一人参加者があったのですが、彼女は獣医で、ボスニア初のシェルターを開く準備をしているところでした。1996年に戦争が終わったばかりで、人間のケアもまだ充分でないであろうボスニアですが、市が資金を出すそうです。その額は決して大きくはないけれども、引き取った犬は意地でも出そうとしない保健所にお金をかけている日本とは大違いです。経済先進国の日本も、そろそろ福祉に本腰を入れて欲しいものだ、と、しみじみ感じました。

